

AFC U-16 WOMEN'S CHAMPIONSHIP THAILAND 2017 TSG 報告

➤ 大会概要

1. 大会期間 2017年9月10日～9月23日

2. 開催地 タイ王国/チョンブリ

試合会場 Chonburi Stadium

Institute of Physical Education Stadium Chonburi

3. 大会方式

予選グループ：各4チーム、2グループによる総当たり

ノックアウトステージ：各グループ上位2チームが進出

準決勝・決勝・3位決定戦を行う

上位3チームがFIFA U-17女子W杯ウルグアイへの出場権を獲得

4. 出場国と大会結果

【グループステージ】

グループA：タイ(THA)・中国(CHN)・韓国(KOR)・ラオス(LAO)

	CHN	THA	KOR	LAO	勝点	得失点差	順位
CHN	*	6-1	2-2	7-0	7	12	1
THA	1-6	*	0-3	3-0	3	-5	3
KOR	2-2	3-0	*	7-0	7	10	2
LAO	0-7	0-3	0-7	*	0	-17	4

グループB：DPR Korea(PRK)・日本(JPN)・オーストラリア(AUS)・バングラデシュ(BGD)

	PRK	JPN	AUS	BGD	勝点	得失点差	順位
PRK	*	1-2	7-0	9-0	6	15	2
JPN	2-1	*	5-0	3-0	9	9	1
AUS	0-7	0-5	*	3-2	3	-11	3
BGD	0-9	0-3	2-3	*	0	-13	4

【ノックアウトステージ】

準決勝 中国 vs DPR Korea 0-1(0-0)
日本 vs 韓国 1-1(0-0)、PK 2-4
3位決定戦 中国 vs 日本 0-1(0-0)
決勝 DPR Korea vs 韓国 2-0(1-0)

【大会結果】

優勝 DPR Korea

準優勝 韓国

第3位 日本

第4位 中国

* 上位3チームが FIFA U-17 Women's World Cup ウルグアイへの出場権獲得

大会 MVP KIM KYONG YONG (DPR Korea ⑰)

得点王 KIM KYONG YONG (DPR Korea ⑰)

フェアプレー賞 日本

➤ 分析の観点

本大会は、来年開催される FIFA U-17 女子 W 杯ウルグアイ大会に向けたアジア最終予選と位置付けられる。FIFA が U-17 女子の年代で W 杯を開催したのは、2008 年ニュージーランド大会からである。U-16 日本女子代表チームは過去、世界大会の予選にあたる AFCU-16 女子選手権をすべて突破し、過去 5 回開催された FIFA 女子 U-17W 杯のすべてに出場している。昨年のヨルダン大会では準優勝し、当時のキャプテン⑩長野風花は大会 MVP にあたる GOLDEN BALL 賞を受賞した。また、2014 コスタリカ大会では優勝を果たし(MVP 杉田妃奈)、2010 トリニダード・トバゴ大会でも準優勝、2008 年大会ではベスト 8 にも関わらず、当時 15 歳で出場した岩淵真奈が MVP を獲得している。つまり、日本の U-17 女子の年代は世界トップのレベルを維持し続けている。

アジアの国々に目を向けると、中国の武漢で開催された前回大会で U-16 日本女子代表チームは、決勝戦で DPR Korea と対戦し、0-1 で敗れ 2 位となった。DPR Korea とはグループリーグでも対戦しており、その時は 1-1 で引き分けていた。翌年の 2016 FIFA U-17 女子 W 杯ヨルダン大会でも DPR Korea と決勝戦で顔を合わせ、0-0 のまま PK 戦となり 5-4 で DPR Korea が勝利、優勝した(2008 年ニュージーランド大会に続き 2 度目の優勝)。その他にも、2010 FIFA U-17 女子 W 杯トリニダード・トバゴ大会では、韓国が世界の座に就き、2012 アゼルバイジャン大会では、DPR Korea が準優勝を果たしている。

こうした結果からも育成年代における女子サッカー界はアジアがリードしていることは間違いなく、来年、ウルグアイで開催される FIFA U-17 女子 W 杯の結果を占う意味でも、この大会は極めて重要な大会として位置付けられる。

中国と韓国も日本、DPR Korea に匹敵する実力を備え、さらにそれを追い越すために様々な取り組み

をしてこの大会に臨んでいることが感じられた。これまでもこの4ヶ国が軸となってU-17女子W杯の出場権をかけた熾烈な闘いを繰り広げてきた歴史があるが、近年は女子のフル代表の強化が成果となって現れているオーストラリア(2017年9月現在、世界ランキング6位。日本は8位)が育成年代でも計画的な強化を行っており、さらにはタイなどこれまでは4強の国々との対戦では大差がつく試合をしてきた国々が着実に力をつけていて、これまで以上に勝つことが難しい大会となることが予想された。

テクニカルの側面に言及すると、世界のサッカーの方向性は、男女ともに「テクニカルに、スピーディーに、コレクティブに、そしてタフに」戦うスタイルで進化し続けている。この点については、フル代表、U-20、U-17のW杯すべてのTSGから同様の報告がされている。

そこで今回のTSGでは、4強の国々を中心にその戦いを分析することで、日本のアジアでの立ち位置を確認し、4強の国々に追従するアジア諸国の現状を分析した。これまでの日本の特長、課題の何が変化しているか、さらには「世界をスタンダードに」した場合の日本女子サッカーの課題が何であり、その課題を克服するために必要なことは何であるのかを見つけ出し、今後の育成と強化の指針にする目的で分析を行った。

➤ 大会の特徴とトレンド(技術戦術的分析)

◎さらに拮抗した実力

今大会では、日本、DPR Korea、中国、韓国は優勝を目指すことが出来るグループ。オーストラリア、タイは準決勝進出を目指すグループ。バングラデシュ、ラオスは地域毎の予選を勝ち抜いてこの大会に出場することを目標にするグループ。同じグループ内でも特徴や課題は異なるものの、大きくはこの3つのグループに分けることができた。第1グループのうち日本以外の3ヶ国は、独自のスタイルで強化を続け、しっかりとその特長が試合の中で発揮されていたことを確認した。特に日本との対戦においてはそれぞれの国が特長を出し戦った。韓国は前回大会ではタイに敗れ準決勝に進出することが出来なかったが、今大会では拮抗した試合に持ち前の勝負強さを発揮し、2位と躍進した。第2グループのオーストラリアはフィジカル的にも戦術的にも特長があり、特に攻撃時にはGKを多用し、確実にビルドアップする戦い方には、こだわりの一片を垣間みることができた。

第1グループの4強同士の対戦結果が示す通り、このグループ内の差は縮まってきている。各国が本気で育成から強化に力を入れているため、実力が拮抗し、紙一重の戦いが続き、ワールドカップの出場権を得ることは極めて困難なものになってきた。

◎世界のサッカーのトレンドと比較して

「テクニカルに、スピーディーに、コレクティブに、そしてタフに」という世界の流れを観点に分析すると、前回大会から大きな変化は見られず、多くの国がポゼッションサッカーを指向していた。DPR Koreaとラオス以外の国ではGKからのビルドアップで攻撃を組み立てることに取り組んでいた。しかし、テクニックが伴わず、プレーの選択肢が少なく、自らのミスでボールを失うことが多く、特にアタッキングサードでの意図的な関わりからゴールを狙う場面が少なかった。守備においては、ボールへのファーストディフェンダーのアプローチが出来ても他の選手の連動した守備には繋がらず、意図的にボールを奪うことが出来

ない場面が多く見られた。これらは攻守におけるテクニック不足、関わりの質(タイミング、アングルなど)の低さがその主な原因であり、前回大会と同じ課題といえる。特に、テクニックの中でも「動きながらのテクニック」は、日本を含めての課題であり、世界のサッカーのトレンドに取り組んでいるものの、成果として積み上がっている国は少なかった。

◎日本のアドバンテージの減少

育成年代からテクニックを重視し、攻守にコレクティブに戦うことに取り組んでいる日本は、これまではアジアにおいても、世界でも、そのプレイスタイルには他に勝るものがあり、大会ごとに高い評価を受けてきた。今大会でもそのスタイルは継承されていたことは間違いないが、ゲームの中で本来の持ち味を発揮できた時間は少なかった。日本の特長を出させないための強いプレッシャーを凌ぐだけの水準に、テクニックや関わりの質が達していなかったことが原因であると考えられる。パワーとスピードに優る DPR Korea や韓国、中国のアグレッシブな戦いぶりの前に、日本の以前のアドバンテージは少なくなっている。

◎チーム戦術への取り組み

今大会での新たな気づきとして挙げられることは、中国、オーストラリアに代表されるように、チーム戦術としてシステムや選手配置のバランスを重視する傾向にあったことである。しかし、まだチームとして成熟していないために、ボール状況を観ることなくポジションを取ることを優先させることが多く、コレクティブなサッカーを指向するためには効果的でない場合が多かった。特に守備の場面では、選手同士の距離が遠く、チャレンジ&カバーがスムーズに出来ていないことが多かった。韓国は試合の流れに応じてシステムや選手のポジションを何度も変えていた。しかし監督の意図するシステム変更を選手自身が十分に理解出来ていないようにも感じた。今後、選手が戦術的な理解を深め、チームとして戦術が機能するようになると日本にとってはさらなる脅威となるに違いない。逆に日本は個人の戦術的理解の徹底とチームとしての戦い方の共有といった点に、少し早い段階からアプローチしていく必要がある。

➤ 日本の戦い

◎システムと戦い方

基本システムは1-4-4-2(中盤はフラット)であった。攻守ともに選手間の距離を適切に保ち、コレクティブに戦うことを狙いとしていた。GKも含めてボールを確実に保持しながらのポゼッションサッカーを指向していた。そのために、各ポジションにおいて、選手個々が状況に応じた適切な判断からテクニックを発揮し、その関わりの中からチームとしてコレクティブに戦った。

◎攻撃

GKを含んだビルドアップを基本とする戦い方であった。基本的には、ディフェンディングサードからショートパスをつなぎながら攻撃を組み立てる。アタッキングサードに進入するときにも、複数の選手が関与することができる距離間と連動性を意識し、相手の守備を突破することにチャレンジしていた。

相手の守備が強固なときには、相手の守備ブロック(ミドルサード)を突破することが難しい場面が見られた。また、相手のレベルを問わず、パスを受けた際に相手 DF がアプローチに来ない場合にも、中盤で前を向き、前方にパスをする場面が少なく、ディフェンディングサードで安易に DF ラインの選手にバックパスをし、スペースのない中で相手に限定される場面や囲まれる場面も見られた。2 人の FW が前線に留まるのではなく、片方の FW が中盤でパスを受けるアクションをし、そこに縦パスが入ったときに、中盤の選手が前向きに関われ、前方にボールを進めるポゼッションができた。しかし、それがいつもできていたわけではなかった。

相手 DF ライン背後へのアクションに関しては、どんな時でも行われていたというよりは、そういった特徴を持った選手が攻撃的なポジションにいる場合に多く見られた。

アタッキングサードでの崩しは、形というよりは、選手それぞれのコンビネーション、状況判断を頼りに行われているように見受けられた。

サイドから複数のプレーヤーが関わって突破する攻撃も多く見られた。サイドの突破の機会の創出に関しては、DF ラインでのサイドチェンジは見られたが、中盤のエリアで MF がサイドチェンジすることは多くなかった。サイドからの突破は同サイドからの突破が多かった。

クロスからの得点という点では多くはなかったが、クロスを上げられる場面で、複数の選手がペナルティエリア内に関われる距離で攻撃をしていた。

◎切り替え(攻撃→守備)

奪われた直後の切り替えは非常に早かった。ボールを失った付近の選手が即座に相手ボール保持者にプレッシャーをかけ、攻守が切り替わる状況から、相手が意図を持ったカウンターをする状況は未然に防げていた。また、ボール付近の選手だけではなく、3 ラインすべてのポジションの選手が適切なポジションに戻ることを意識していた。

しかし、厳しいゲーム状況下では、サイドの選手の中央での絞りや FW の選手の戻りが遅く、DF ラインと MF のラインの距離が広くなり間延びする場面が見られた。

◎守備

11 人の選手が適切な距離を保ち、ブロックを形成して守備をしようとするものの、チーム全体がコレクティブに関わりながら意図的にボールを奪う場面は少なく、状況に応じて選手個々の判断でボールを奪いに行くことが多く見られた。

また、相手のロングフォワードパスに対しては、GK の状況判断と適切なタイミングでのブレイクアウェイや DF ラインの選手の予測と準備、GK と DF の選手の連携によって、大きなピンチになる場面は少なかった。しかし、ゲームの状況の変化や時間帯によって相手にロングフォワードパスを多用されると、DF ラインと MF ラインの間のスペースが広がり、セカンドボールを相手に拾われる場面が見られた。

クロス守備に関しては、クロスを上げられる場面はあったが、相手の判断のミスやクロス質の低さもあり、危ない場面を作られることは少なかった。

全体的に相手のミスによりボールを奪うことが多く、球際での戦いやハイボールの競り合いが目立った

弱さを見せることはなかった。

◎切り替え(守備→攻撃)

守備から攻撃に切り替わった状況ですぐにボールを失うということは少なかったものの、切り替わった瞬間の攻撃の優先順位を意識した一瞬の隙をつく攻撃は少なかった。また、サイドにカウンターを仕掛けるスペースがある場合や相手のポジショニングにずれがあり、スペースがある場合でも、そのスペースを突くための中距離のスプリントが少なく、もう一度、攻撃を組み立てなおす場面が散見され、大会全体を通して攻撃におけるファストブレイクの意識が低いように感じた。

しかし、W杯出場を決める3位決定戦での貴重な唯一の得点は、自陣でボールを奪ったところからの、個人のテクニックと全体の押し上げというハードワークを発揮した速い突破からの得点であった。

◎ゲーム出場機会

日本は今大会を通して、グループステージとノックアウトステージで合計5ゲームを戦った。

そのうち、5ゲーム全てスターティングメンバーとして出場した選手は1名であった(MF⑩木下桃香、5ゲームフル出場)。その他の4ゲームでスターティングメンバーとして出場した選手は6名、4ゲームをフル出場した選手は3名であり、そのうちの1名はGKであった。

この点は、ノックアウトステージに進出した他の国と比較して、特筆に値する点である。日本以外のチームを見てみると、5ゲーム全てでスターティングメンバーとして出場した選手は、DPR Koreaは9人(5ゲームフル出場は5人)、韓国は5人(全員が5ゲームフル出場)、中国は10人(全てのゲームを同じフィールドプレイヤーのスターティングメンバーで戦った、5ゲームフル出場は6人)であった。

また、日本は大会を通して出場の機会がなかった選手は1名で、この選手に関しては怪我を考慮しての判断であった。(DPR Koreaは4名、韓国は5名、中国は7名)。

3~4ゲーム分に相当する270~359分出場の選手が日本は9名であった。(DPR Koreaは1名、韓国は4名、中国は2名)。

これらのデータから、日本は登録メンバー全員の総合力をもって大会を戦ったと言える。更に、U-16年代の多くの選手をアジア予選のピッチに立たせプレーする機会与え、国際レベルのゲームを経験させたことは、選手の将来を考えると大変意味深いことである。

【グループステージの戦い】

第1戦 vs オーストラリア

結果は5-0(前半1-0、後半4-0)で勝利した。

1-4-3-3システムで、ディフェンディングサードでGKやCBからショートパスをつないでビルドアップする相手との対戦であった。日本は11人全体でコンパクトなポジショニングでの守備を試みた。2人のFWである⑩大澤春花、⑦瀧澤千聖が相手CBにプレッシャーをかけたが、その際に2人のFWとMFのラインに若干のスペースが空いてしまう。相手の攻撃の狙いは、ショートパスをつないでのビルドアップからスタートすることだったが、質を欠き、ボールを支配されることはなかった。しかし、日本の守備におい

て、ボール保持者に対するプレッシャーは遠かった。相手のロングフォワードパスに対しては、DFの選手の予測と準備、全体の統率されたラインコントロールでピンチになることは少なかった。

攻撃においては、GKを含みパスを丁寧につないで攻撃を組み立てた。サイドからの多彩な攻撃も見られ、サイドMFがウイングとしての役割と共に、チャンスがあればダイアゴナルなスプリントでゴールに向かうアクションも見られた。

ゲームの立ち上がり前半5分に先制点(右SB⑫善積わらいのパスに⑪大澤がDFの背後に走り込みワンタッチシュート)、後半3分に左SB②富岡千宙が追加点(FKを直接得点)を奪ったことで大会初戦のゲームを優位に進めることができた。

第2戦 vs バングラデシュ

バングラデシュは、24か国(各6チーム×4グループ)が出場したアジア地域予選において、同じグループになったチャイニーズ・タイペイを4-2(同グループ6チーム中2位)、イランを3-0(同グループ3位)で破って本大会に出場してきた国である。

結果は、3-0(前半3-0、後半0-0)で勝利した。

日本はGKを含み、スターティングメンバーを8人入れ替えてこの試合に臨んだ。終始、ボールを支配したゲームであったが、後半を0点に抑えられたこともあり、課題の残るゲームとなった。

相手のシステムは1-3-6-1で、スピードがあり、コンタクトしながらでもボールを前に運ぶことができるFWの⑨MOSAMMAT SIRAT JAHAN SHOPNAを中心としたカウンター気味の攻撃がほとんどであったが、そういった予測しやすい攻撃に対してもゴール前まで運ばれるシーンもあった。

守備時に1-5-4-1または1-4-5-1の形でブロックを敷いて守る相手に、日本はアタッキングサードでの攻撃の崩しの質を欠いた。両SBの⑮新井美夕、⑯後藤若葉が高い位置にポジションをとり、人数をかけた攻撃をした。しかし、中盤でのサイドチェンジは少なく、攻撃時のスピードアップやボールを動かす際のリズムの変化も乏しく、また、スペースがない中では個のテクニックの正確性を欠いた。特に後半は、ペナルティエリア10~15mあたりに9人で2ラインのブロックをしき、縦方向へのパスにはプレッシャーをかけて来られたため、サイドからの突破がさらに増えた。しかし、パススピードが遅いため、パスの受け手にプレッシャーがかかる状態が多かった。

FW⑨田中智子がFKをワンタッチシュートで決めた先制点では、日本チームが準備してきたプレーが成果となって得点につながったものであった。

第3戦 vs DPR Korea

結果は、2-1(前半0-1、後半2-0)で勝利した。

グループステージ最終戦のこのゲームは、既に両チームともに勝ち点6でノックアウトステージ進出を決めており、グループ1位突破をかけた戦いであった。

互いが1-4-4-2システムで臨んだゲームは、前半、DPR Korea優勢のゲームとなった。その要因には相手の意図的でコレクティブな守備とそれを支える選手個々の球際の強さを含めた守備能力の高さがあった。攻撃においても、相手の2トップの⑩KIM RYU SONGのポストプレーに関わる⑰KIM KYONG ONG

の連動や、中盤の選手の前向きに関わる厚みのある攻撃に日本は中央だけでなく、サイドからの突破からも相手にチャンスを作られた。日本は前半 18 分に先制点を奪われ、その後も主導権を握ることはできなかったが、苦しいゲーム展開の中でも粘り強く戦い、追加点を与えなかった。

後半、相手の運動量が落ち守備ブロックが後退したところで、ポゼッションする時間が増え、アタッキングサードに進入する機会も増えた。後半 17 分に、中央 MF⑩中尾萌々と FW⑨田中を同時投入した後、FW が縦並びになり、スペースができたことで、サイド MF が中央へアクションするようになり、攻撃時の選手の距離間が改善し、主導権を握ることができる時間帯が長くなった。

逆転弾となった 2 点目は、左 MF でプレーしていた⑳山本柚月が FW にポジションを移した直後のプレーであり、ペナルティエリア内の混戦のこぼれ球を拾ってからのシュートであった。また、それに至るプレーはミドルサードから入れた縦パスへの複数の選手(合計 5 人)の関わりから、突破を図ったものであった。

ゲーム終盤の相手の攻撃に対しては、両 CB⑱後藤、⑤松田紫野と GK⑱大場朱羽を中心に冷静に判断良く対応した。

【ノックアウトステージの戦い】

準決勝 vs 韓国

結果は、1-1(前半 0-0、後半 1-1)、PK2-4 で敗戦した。

日本は攻撃時には 1-4-4-1-1 の形で、2 人の FW の⑪大澤、⑦瀧澤が縦並びの関係になり、相手 MF と DF ラインの間で受けるアクションと、DF ライン背後で受けるアクションの両方を試みた。また、サイドの MF の中央へのアクションや SB の攻撃への関わり(特に右 SB㉒善積)を糸口に攻撃を組み立てた。先制点は後半開始直後に奪った。この得点は、後半から投入された FW⑨田中のドリブル突破から思い切りのよいシュートによるもので、このゲームのファーストプレーによるものであった。この得点に至るまでには、他の選手のパスを受けるためのアクションがあり、そのプレーに相手 DF が引き付けられ、シュートに向かうスペースを創るといふ、一連の連携があった。

韓国はゲーム中に 3 回、システムとポジションを変えた。1-4-4-2 と 1-4-3-3 の 2 つの基本システムをゲームや時間帯における狙いと、選手の特徴によって使い分けている印象で、㉑CHO MIJIN のポジションが、ゲームスタート時は FW、日本の攻勢が続くと CB、そして日本の先制点後、韓国にとって得点を取りに行く時間帯になると再び FW でプレーした。また、後半 15 分には、前線でボールをキープできるパワーのある FW⑱KO MINJUNG を投入し、中盤を飛ばしたロングパスも多用し、セカンドボールを拾い、前向きに関わることで攻勢を強めた。

韓国にとって貴重な同点弾となった日本の失点シーンは、ボールサイドである左サイドに全体のポジショニングが偏り、ボール保持者へのプレッシャーが甘くなったところから、中盤でフリーになった相手選手を基点に連続して 2 本の縦パスを通された結果、ペナルティエリア内で混戦になり、PK を奪われたものであった。

3 位決定戦 vs 中国

結果は、1-0(前半 0-0、後半 1-0)で勝利した。

このゲームは世界大会出場の最後の 1 枠をかけた戦いであった。

中国は、大会を通して一貫して 1-4-3-3 システムで戦い、攻守両面において、意図的にコレクティブにプレーすることにトライしていた。このゲームも同様で、攻撃では、自陣からショートパスをつないでビルドアップした。また、MF と FW の適切なポジショニングにより、意図的に中盤で数的優位な状態を作り、⑧ OU YIYAO を中心に MF が日本の DF ラインと MF ラインの間でフリーな状態でパスを受け、有効な攻撃につなげた。更に、このゲームでは他のゲームに比べ、両サイド MF が幅を広くとり、スペースを上手く使いながら攻撃を組み立てていた。守備では、ミドルサードに一旦ブロックをしき、中央の縦パスのコースを消しながら、少しずつ守備ブロックを前に進め、1 トップの⑩ TANG HAN とトップ下に位置する MF⑧ OU が DF ラインにプレッシャーをかけた。

日本は、特に前半、中盤の構成で相手に数的優位な状況を再三作られ、主導権を握ることができなかった。基本の形である 1-4-4-2 から、ビルドアップ時には中央 MF の 1 人と、FW の 1 人が一つ下のラインに降りてパスを受けるアクションをし、選手同士の距離間をコンパクトにして、ボール保持者に攻撃の選択肢を多くすることを、相手に守備の狙いを絞らせないようにしながら攻撃を仕掛けた。しかし、ボール保持者がフリーな状態で前向きにボールを持った時も、攻撃に関わる人数が少なく、スピードも上がらないため、相手に帰陣され守備ブロックをつくられ、有効な攻撃ができずに苦しい戦いを強いられた。

しかし、チーム全体で集中力を切らさず、粘り強く戦った結果、後半 9 分に自陣でボールを奪い、FW2 人のコンビネーションで素早くアタッキングサードにボールを進め、MF を中心に全体も連動して押し上げた結果、MF⑩ 中尾が決勝点を決めた。

【日本の特長と課題】

1) 特長

◎チーム一丸となつての戦い

今大会の結果は第 3 位という結果であったが、前回大会の決勝戦、更に昨年の FIFA U-17 女子 W 杯ヨルダン大会の決勝戦で敗れた DPR Korea にグループステージ第 3 戦で苦しい戦いを強いられながらも逆転勝利を収めたことは、このチームのポテンシャルの高さを感じさせるものであった。

大会 5 ゲームを通して怪我の選手を除き、すべての選手がピッチに立ってプレーし「国際大会」、「アジアの戦い」を経験できたことは、日本の U-16 代表選手全体のレベルアップにつながる大会となったと言える。また、出場した選手が個々の特長を発揮しながら、同じチームコンセプトのもとでプレーできたこともチーム全員の共通理解と目指す方向性の共有という点では成果と言える。

◎テクニックを活かした攻撃の組み立て

日本は全てのゲームにおいて、終始コレクティブに戦うことにチャレンジした。自陣から選手それぞれが確実に意図をもったパスでビルドアップし、攻撃を構築した。主導権がとれない時間帯であっても、このことにトライし続けた。また、前半にポゼッションがうまく機能しなかったゲームでも、後半に選手同士

の距離やボールを動かすテンポを修正し、劣勢な試合を盛り返すこともできた。特にグループステージ第3戦で対戦した DPR Korea とのゲームでは後半、相手の運動量が落ち、プレッシャーが十分ではなくなったこともあるが、選手が意図と勇気をもって「自分たちのサッカー」をやり続け、改善し、逆転して勝利したことは、個々の選手が持っているポテンシャルの高さと、日本がチームとしてのコンセプトの共通理解がなされていることを実証した。

◎状況を判断し、選択肢を持ちながらプレーする習慣

日本は他の参加国と比べ、攻撃時の組み立てや前線の崩しにおいて、多くの選択肢をもちながらプレーすることができていた。相手を観て状況を判断しながらプレーすることが習慣化していることで、攻撃に多くのアイデアをもってプレーすることが可能になっていた。特に、アタッキングサードにおいて、選手同士が関わりながら状況に応じて、個々のもつテクニックで局面を打開するなど多彩な攻撃も見られた。

日本と同じくパスをつなぎながらのビルドアップを指向する他の参加国と比較しても、この点は、大きなストロングポイントであった。オートマチックに決められた形に拘ったなかでポジションをとり、ボールを動かすことが散見される他の参加国に比べ、日本はシステムやポジションなどの基本的な役割の実行のみに留まらず、それぞれが複数の選択肢をもって、状況に応じた判断を伴ったプレーをしようとする場面が多く見られた。

すべてが成功につながっていたわけではなく、テクニックや判断における改善すべき点はまだ多く残っている。しかし、今後、年代が上がった際に、スピードやパワー、体格が勝った個が意図的で強固な守備組織を構築してくることを考え、そういった相手を崩し得点を奪わなければならないことから逆算すると、U-16年代でこのようなことにチャレンジし、習慣づけておくことは重要である。

◎粘り強い球際の守備

日本は、過去のアジアでの戦いにおいて、スピードやパワー、体格の差が顕著に影響する球際での競り合いやロングキックを多用した攻撃に対するハイボールの処理、そしてそのセカンドボールを拾われた2次攻撃によって劣勢に立たされ、苦戦を強いられた経験をしている。

今大会では、対戦国のほとんどがビルドアップを指向した戦いをしてきた。したがって、終始、スピードやパワー、体格のアドバンテージを前面に押し出した戦いや、ロングキックから攻撃をしてきたわけではなかったが、ゲームの状況によっては、その様な攻撃を仕掛けてくる場面はあった。これに対し、日本はDFラインを中心として、ロングキックに対しては、ほとんどの局面においてヘディングで競り合い、跳ね返す場面や、競り勝てない状況でも相手に自由にプレーさせない対応が出来ていた。

自陣での守備において、相手のパワーやスピードに圧倒されることはなく、背後のスペースに走り込まれた状況での対応など、不利な状況での対応でも粘り強く対応し、味方のサポートを待つ場面も見られた。また、選手同士が接近し、コンタクトが必要な場面においても粘り強く対応し、身体を入れて奪うプレーも見られた。

DF 背後のスペースを狙ったロングボールに対しても、DF は予測をもって準備のポジションをとり、GK と連携した守備で対応し、ロングボールから大きなピンチになることはほとんど見られなかった。

2)課題

世界のサッカーのトレンドが「テクニカルに、スピーディーに、コレクティブに、そしてタフに」という方向で進んでいること、そして、その質が急速に進化していることを考えた時に、「日本のストロングポイントを更に伸ばし、世界のトップに立つために」という観点から、以下の課題を挙げる。

◎安定したポゼッションを可能にするためのテクニック

今大会を分析するなかで対戦した国々を見渡すと、チームとして意図的にボールを奪いに来るといふ相手は多くはなかった。また、意図的にボールを奪いに来たとしても、それを構成する個の質が「世界基準」で考えると必ずしも高いとは言い切れなかった。つまり、ボールを失う要因の多くは、日本の選手たちの個の質にあったと分析できる。世界のトップに立つことを考えると、ハイレッシャー下でもボールを失わないための判断を伴ったテクニックを身につける必要がある。また、ボールを失う原因は、本来、日本のストロングポイントとしたいベースの要素であるため、それが常に発揮できなかった現実は、大きな課題といえる。

具体的には、テクニックの精度が欠けていることが目立った。それは、受け手のどちらの足にパスを出すのか、受け手にプレッシャーをかけようとしている相手選手がどれくらいの距離で、どの方向から来るのか。そして、その相手選手の個の特徴(スピードやコンタクトの強さ)を判断したうえで正確にパスをだすことである。更に、パススピードにも課題は残った。次の展開のイメージをもち、攻撃時のスピードアップなど、状況に応じた正確な判断ができていれば、適切な速さのパスを出す選択ができるが、そういった判断がない状況で出されるパスが多く見られ、全体的には、パススピードが遅いという印象を受けた。

また、相手DFに狙いを絞ったアプローチをさせないためには、チーム全体で連動し、速いテンポでボールを動かすことが必要になってくるが、この点も課題が残った。オフ・ザ・ボールの選手の質(ポジショニング、アクションのタイミング、オフ・ザ・ボールの選手同士のポジションのバランスなど)が課題であると共に、ボールをコントロールしてからパスを出すまでのテクニック発揮のテンポ、パスした後の動きも課題であった。

◎攻撃の優先順位を意識したプレー

大会を通して、攻撃において優先順位を意識したプレーにも課題があった。『ボールを失わずに、前に進める』という本来のポゼッションプレーの目的から外れ、ボールを失わないことが優先されるプレーが散見された。

ディフェンディングサードで、GKを含めてビルドアップをするときやミドルサードで余裕をもって前へプレーできる状況であるにも関わらず、簡単にボールをDFラインに下げるプレーが見られた。また、ゲームの中で、縦パスが出せる状況であってもDFラインの選手や中盤のMFの選手から前線に位置するFWの選手にパスが入らないことがあった。このことで攻撃時に後方の選手やサイドの選手の前向きな関わりが少なくなり、攻撃の流動性に欠けた。更に、相手チームが組織的に意図をもって前線から守備してくる場合に、DFラインのボール保持者がスペースのない状況で相手に囲まれボールを失うこともあった。

ミドルサードでの攻撃の組み立てにおいても課題はあった。ボール保持者が前を向いてパスを出せる状況で前方にスペースがある場合に、よりゴールに近いポジションでボールを受けることで、パワーをもってアタッキングサードに進入できる場面を有効に使えないことがあった。予測を伴ったスタートポジションや、前方へのスプリント能力、前方に関わってよいかそうでないかのリスク管理を含んだ判断と決断に課題が残った。

守備から攻撃の切り替え時には、相手の守備組織が形成される前にスピードを伴った攻撃でフィニッシュまでもっていくことが重要であるが、守備から攻撃へ切り替わる予測と、攻撃の優先順位を意識したプレーの準備が足らず、有効なファストブレイクにつながらないプレーが見られた。

◎アタッキングサードでの崩しの質

個々の選手の状況判断とアイデアを活かしたアタッキングサードの攻撃は日本の特長であり、複数の選手の意図的な関わりやコンビネーションで、アタッキングサードに進入する機会は他の参加国に比べて多く見られた。しかし、ここから「得点を取る」ということには課題が残った。よりプレッシャーが厳しくなるアタッキングサードにおいて、ラストパスの精度（受け手のアクションに合わせたパスの質）とフィニッシュの質（シュートの強さとコース、タイミングや駆け引き）、コントロールから素早いフィニッシュには改善の余地が残った。グループステージでの DPR Korea 戦、ノックアウトステージでの韓国戦、中国戦でも得点のチャンスが複数回あっただけに、これから世界のトップを目指すためには、それらのチャンスを確実に得点に結び付けることが必要である。

◎意図的にボールを奪う守備

ボールを失った後の切り替えの早さは前述したとおり、チーム全体で共通理解が図られ、プレーとして表れていた。しかし、チームとして「意図的にボールを奪う守備」に関してはゲームパフォーマンスとしては多くは見られなかった。特に、中盤で意図的に数的優位を作ってくる相手（例えば 1-4-3-3 の中国戦）には、ファーストディフェンダーの決定が遅れ、意図的に相手を追い込むことができず、また中盤のマークも曖昧になり、ボールを奪うチャンスを逃すことが散見されたばかりか、中盤でフリーな選手から攻撃の基点となるプレーを許してしまった。

選手同士がお互いにコミュニケーションをとり、積極的に連携、連動してボールを奪う守備を行えるようにすることが重要である。更に、ボールを奪いに行く局面においても、「ボール保持者に対して複数で挟みに行くのか」、ボール保持者に対してファーストディフェンダーが対応している時間を使い「スペースをカバーするために戻るのか」、ボールを保持している相手選手とそれに対応している味方選手の状況を観て判断し、コミュニケーションをとる能力の向上等、戦術理解を含めて更なる改善の余地が残った。

◎運動量

日本は今大会において、チーム全体がコレクティブに戦い、攻守共に連携、連動した戦いをした。ボールを失った後の切り替えも早く、他国と比較して劣っていたわけではない。しかし、U-20 代表やフル代表といった、さらに上の年代の戦いから逆算し、日本が世界のトップを目指すうえで、U-16 年代でベース

となる運動量を更に高めておく必要がある。

日本が世界との戦うなかで、攻守両面において多くの関わりからプレーの選択肢を増やし、意図的なプレーで他国を上回る「Japan's Way」をピッチの上で具現化するためには、運動量は大きな要素であり、生命線と言っても過言ではない。更なるレベルアップと、ピッチ上において明らかに相手を上回るだけのプレーに反映させることが重要である。

➤ 各チームの分析

DPR Korea

システムは一貫して1-4-4-2であった。攻守共に、一貫したコンセプトで徹底された形で戦う。個々の選手はフィジカルの要素に優れ、既に高い能力を身につけている。またポジション毎の役割に徹してプレーするため、判断や決断が早く、チーム全体の共通理解も高いことから、ゲームを通じて個々の能力を発揮し続けられる。また、テクニクにおいては、「止める・蹴る」の質が高く、フリーの状況やスペースがある状況下では、自チームのミスによりボールを失うことは少ない。しかし、相手DFに囲まれるとテクニクの精度が落ち、ボールを失うこともあった。

攻撃においては、ほとんどのゲームにおいて、主導権を握ってゲームを進めることができるため、相手陣内でボールを奪って攻撃がスタートすることが多い。ボールを保持したときには2人のFWの⑩KIMと⑪KIMを基点にし、この二人の選手への縦パスから攻撃をスタートさせることが多い。この2人のFWやサイドMFの⑭KIM YUN OKなどを筆頭に、多くの選手が攻撃的なポジションを取り、テクニクと判断、運動量を活かした攻撃を行った。また、攻撃にSBが関わることも多く、厚みとパワーをもって攻撃をしかけた。

守備においては、チームとして意図的で組織的な守備を行った。フィールドプレーヤー全員がお互いの距離を保ちコンパクトフィールドを作り、コレクティブな守備を行った。これらのプレーを支える要素として、個々の選手のハードワーク、徹底した役割の遂行、球際やコンタクトの強さがあった。基本的には2人のFWが相手ビルドアップのスタートとなる、CBに対しプレッシャーをかけるところから守備がスタートする。そして、横パスに対しても連動してアプローチし、サイドでボールを奪うか、中央の守備ブロック内に縦パスが入ったところで、グループで連続してボールに強いアプローチをかけボールを奪うことが多い。全体が常にコンパクトな距離を保っているため、相手ボール保持者に対し、複数で囲み挟んで奪うことも多い。相手にロングボールを蹴られることもあるが、前方の選手が蹴る選手にアプローチしているため、意図的で正確なパスとなることは少なく、多くの場合、4人のDFラインは適切に対応ができていた。

また、大会を通してメンバーの交代がほとんどなく、後半になると運動量が落ちることがあった。このことで、相手のDFラインの選手にプレッシャーがかからず、守備ブロックが後方に下がることになり、相手に余裕をもったビルドアップを許すことにつながる場面も見られた。また、攻撃のリズムが一辺倒で変化が少ないことから、相手の守備組織を崩しきれないゲーム展開も見られた。

韓国

システムは主に、1-4-1-4-1、1-4-3-3(守備時 1-4-2-3-1)や、1-4-4-2 を併用していた。相手やゲーム状況によって、ゲーム中でもシステムを変更していた。

攻撃時においては、自陣からパスをつないでビルドアップし、ミドルサードやアタッキングサードでもショートパスをつなぎ、複数の選手の関わり、コンビネーションプレーから得点の機会をうかがった。しかし、実際に有効な攻撃となったのは、数人のアタッカーの個の力に頼ったものであった。

守備においては、4人のDFラインが中心であり、CBである⑳CHO MI JINが素早いカバーリングと質の高い1vs1の対応でDFラインを統率した。基本的には中盤も4人で守るが(1-4-3-3の場合には両サイドMFが下がる)、チーム全体としての、どのエリアで奪うかといった意図的な狙いは見えなかった。ボールを失ったあとの守備への切り替えは早く、相手ボール保持者に対する速いアプローチは徹底されていた。

コンセプトを変化させている過渡期であるのか、従来の韓国の怖さが影を潜めている印象を受けた。それは、韓国が元々有していた特徴である、球際の強さ、攻守ともに前方へプレーする際(アプローチ、インターセプト、DF背後へのスプリント)の力強さが見えた場面が少なかった点である。しかし、決勝におけるDPR Koreaとの対戦では、闘争心をあらわにした本来の韓国の強さと、グループでの関わりと意図を持った崩しを発揮する場面もあり、対戦相手によって、パフォーマンスの質が異なる面はあるが、依然、手強いアジアのライバルであることには変わりなかった。

また、他チームと違う特徴として、選手のフレキシブルなポジションチェンジが挙げられる。

⑳CHOはCBとFW、⑥NOH HEON YEONはCMFとCB、②CHANG EUN HYUNは左SBとCMF(守備的)、⑦HWANG AHH YEONはトップ下と左SHなど、複数ポジションでプレーする選手がいた。決勝戦では、⑳CHOの負傷退場の影響も考えられるが、大会のほとんどを右SBで出場していた(5試合フル出場)③LEE EUNYOUNGを後半途中からFWでプレーさせたが、FWとしてもそんな色なく、質を伴ったプレーを発揮していた。また、背番号⑩でFW登録のKIM HYEJEONGが大会初戦の中国戦、開始9分で負傷退場しており、この選手が大会を通してプレーしていたら、さらに強力なチームであった可能性も考えられる。

中国

中国は1-4-3-3システムを採用し、攻守にコレクティブなサッカーを指向していた。

全体的なチームコンセプトとして、常にGKからパスをつなぎ、ボールを保持する時間を長くする中で、ボール保持者と周囲の選手が関わりを持ち攻撃に繋げることに、グループリーグ、ノックアウトステージ共に、大会を通し、一貫して取り組んでいたのが印象的なチームであった。

攻撃においてはGKからビルドアップをし、自陣からショートパスを繋ぎ攻撃を組み立てるチームである。中盤ではMF⑨SHEN MENG YUを基点とし、両サイドの幅を広く使った攻撃を展開した。SBとサイドのMFとのコンビネーションでは、相手の守備の状況に関係なくパターン化した形で強引に突破しようとする場面も見られた。また、中盤でタイミング良くパスを受け、ボール保持者が前を向けた時には、前方のスペースへの関わりが増え、攻撃に厚みがあった。

守備においては、ボール状況に合わせた守備が出来ることは少なかった。特に前線からボールを奪いに行く場面では、中盤の選手が連動していないために効果的にボールを奪うまでに至らない場面が見られた。

選手個々のもつ身体能力が高く、走力、テクニックが更に備われれば、アジアの中で「脅威なチーム」へと変貌することも考えられる。

オーストラリア

システムは 1-4-3-3(中盤は 2 アンカー)であった。

攻撃においては、自陣からショートパスをつなぎ、ビルドアップするプレースタイルであった。ビルドアップするときは、決められた形としてプレーしている印象を受けた。ほとんどの場合、GK や CB から始まり、中央の MF の⑥TAYLOR RAY がパスを受けに下がり、トップ下の選手は FW に近い高い位置でパスを受けようと試みた。両サイド MF はサイドの高い位置でボールを受ける為のポジションをとっていた。

攻撃で突破を図る際に、選手個々の持つパワーとスピードを活かした突破は迫力を感じる反面、攻撃のビルドアップに見られるように、ショートパスをつなぐ際のボールの動かし方はパターン化された印象で、予測しやすいものであった。またサイドの MF が、サイドライン辺りまで幅を広くとったポジションを取るため、各選手の距離間が広く、その結果、ボール保持者に対しての関わりが少なくなっていた。

守備においては、1-4-1-4-1(又は 1-4-5-1)のシステムで、前からプレッシャーをかけようとする狙いが見えた。しかし、チーム全体が意図的にボールを奪う狙いを持ってプレーしていたかという点では機能していない印象で、ボール保持者に対して、その近くの選手がそれぞれの判断で守備を行っているように見えた。また、DF と MF の間にスペースがあるなど、全体が間延びしている感もあり、相手のポゼッションを容易にさせてしまう要因となっていた。

タイ

基本的なシステムは、1-4-1-4-1 または 1-4-4-2 であった。

比較的プレッシャーの緩いラオス戦では、ボールを繋ぎ、終始、主導権を握って戦うことが出来た。しかし、中国戦や韓国戦においては、試合の序盤はボールを繋ぐことを試みていたが、相手のプレッシャーが強くなると、パスをつなぎながら DF ラインよりも前にボールを運ぶことが出来ず、徐々に意図を伴わないロングボールを蹴ることが多くなっていった。意図的な崩しから相手ペナルティエリア内に進入する機会は少なく、プレッシャーを回避するためのテクニックが不足している選手が多かった。

守備においても、コレクティブに意図的にボールを奪う場面は少なく、相手のミスからボールを奪った際も、相手陣内にボールを運ぶ前に自陣でボールを失うことが多かった。ゴール前の守備では、個々の選手が粘り強く対応する場面も見られたが、中盤で相手がドリブルで仕掛けてくる場面では、粘り強く対応できず、容易にドリブルを許してしまう対応も多かった。また、セットプレーの守備の対応にも課題があった。

バングラデシュ

守備の際にマンマークする場面が多く、マークしている選手についてポジションを移動していくため、システムを把握することが困難だった。ゲームにおいては、多くの時間を守備に費やしていた。

攻撃の際、ゴールキックの場面では、ゲームを通して GK から DF ラインの選手にパスを繋ぎ、攻撃を組み立てようと試みたが、ほとんど自陣でボールを失い、選手個々のテクニックの不足は顕著であった。前線にスピードがある選手を配置し、カウンター攻撃を試みる場面も見られたが、中盤でプレッシャーをかけられるようなゲームでは、前線へ効果的なパスが配給されることは少なく、また、パスが繋がった場合でもボール保持者が前向きでパスを受けることが出来なかった。

守備ではチーム全体での意思統一がなされているようには見えず、3 ラインをコンパクトに保つことも出来ていなかった。チャレンジ&カバーの問題と、それ以前にボールへのアプローチがなくなる時間帯もあった。ベンチワークにも課題が見られ、多くのプレーが監督からのコーチングの影響を受けており、選手自らが判断してプレーする機会を失っているように見えた。

ラオス

ラオスは基本的なシステムは 1-4-1-4-1 であった。

ほとんどのゲームにおいて、守備をする時間の方が長く、意図的にコレクティブに守備をするというよりは、相手をマンツーマンでマークし、選手個々の判断でボールを奪いにいく場面が多くみられた。

攻撃では、この大会で唯一、GK を基点としたビルドアップは全く行わず、前線へのロングフィードに頼る攻撃をしていた。しかし、そのプレーは意図して出したロングパスは少なく、ボールを失うことが多かった。

チームとしての課題は多くあり、指向する方向性も現代サッカーからかけ離れているように感じられた。しかし、GK を含めた選手全般に共通する特徴として、俊敏性と持続性が見られた。そのため、この大会を通じてアジアのトップレベルのゲームを経験できたことは、将来へつながる大きな経験となったと考えられる。

➤ ベンチマークプレーヤー

◎KIM KYONG YONG (DPR Korea⑰)

ポジションは FW であった。今大会の得点王であり、MVP も獲得した。もう一人の FW⑩KIM RYU SONG が後方からのボールを引き出してできたスペースに判断良く走り込みチャンスメイクする。ヘディングやキックの能力にも優れ、得点力がある。

◎KIM RYU SONG (DPR Korea⑩)

ポジションは FW であった。DF ラインの背後を含め、広範囲にスプリントし後方からのパスを引き出す。相手を背負ってのキープ力とその後のパスの質も高く、攻撃の基点となる。⑰KIM とのコンビネーションもよく、得点を演出するアシストができる。

◎田中智子(日本⑨)

ポジションはFWであった。交代での出場が多かったが、得点機会を創出するプレーに優れている。ビルドアップ時には中盤に降りてボールを引き出すこともでき、攻撃における多様なアクションができる。

◎CHO MIJIN(韓国⑩)

ポジションはCBとFWであった。攻守両方のポジションで質の高いプレーができるユーティリティープレイヤー。スピードがあり、CB時には的確なカバーリングと1vs1の対応ができ、FW時には状況に応じた判断とプレーの選択からチャンスメイクできる。

◎SHEN MENGJU(中国⑨)

ポジションはMF(アンカー)であった。ビルドアップ時にDFラインからボールを引き出し攻撃の基点となる。パスを受けた後のプレーの判断がよく、ロングパスの精度も高い。

◎木下 桃香(日本⑰)

ポジションは中央のMFであった。攻守にハードワークでき、攻撃から守備の切り替え時の献身性がある。テクニックと判断力にすぐれ、ビルドアップ時も攻撃の基点となる。

◎Ri KUM HYANG(DPR Korea⑤)

ポジションはCBであった。相手の前方へのパスへの反応と1vs1の対応がよい。

◎大場 朱羽(日本⑱)

ポジションはGKであった。DFライン裏へでたボールへの対応(判断・決断・テクニック)がよい。基本的なテクニックもあり安定している。

◎KANG JIYEON(韓国①)

ポジションはGKであった。シュートストップの技術と反応がよい。あわや失点という相手シュートを幾度も防いだ。

➤ セットプレー

今大会の総得点69得点のうち、12点がセットプレー(PK含む)から生まれた得点だった。

日本の攻撃ではオーストラリア戦で得点したFKにおいて、②富岡が技術のしっかりした正確なキックを披露した。CKの攻撃においては、相手チームの特徴に応じて、様々な形を試みた。例えば、オーストラリアの守備がゾーンを採用した際にはショートコーナーで対応した。また、DPR Koreaの守備がマンツーマンで守るのに対し、ゴール前への入り方の工夫、ニアゾーン、ファゾーンへ蹴り分けたキックで相手の守備を困惑させていた。

日本はCKの守備においては、マンツーマンで対応した。GKからの適切なオーガナイズと指示のもと、

ポジショニングを含め、相手より先に準備すること、マークの確認、責任を持ってマークに付くことはできていた。しかし、相手との競り合いには課題があった。更に、交代した選手が、マークや守備をするポジションがスムーズに確認できていなかった事など課題は残った。

上位国はセットプレーの攻撃において、得点源の一つとなるくらい準備されていた。特に DPR Korea はシンプルにターゲットに合わせる正確なキック、合わせる選手の打点の高いヘディングの質は高かった。優勝した DPR Korea の CK は、チームの大きな得点源となっていたことが印象的だった。

守備においては、マンツーマン、ゾーン、この2つの併用といったように、チームによって様々だった。どの方法においても、基本的な対応としては、マークする相手とボールを同一視する、相手より先に触る、プロテクト&カバーであるが、その意識は低く、GK からの素早いオーガナイズの指示も徹底されていなかったことなど、この年代の課題として挙げられる。

➤ ゴールキーパー

今大会において、GK のプレーは、攻守にわたり、状況に応じた「技術と判断」に未熟な部分はあるものの、ノックアウトステージに進出できなかった国の GK でも、攻撃の起点になろうとするなど、積極的なプレーが多く見られた。特に中国、オーストラリアの GK は、有効的な関わりという面では不十分ではあったが、ビルドアップに積極的に関わろうとする意識は強く見られた。

守備においては「GK が FP(フィールドプレーヤー)と関わりを持ち、協力してボールを奪いにいく」視点、つまり、ブレイクアウェイ、クロス、シュートストップの視点で分析すると、4つのグループに分かれた。

1) バングラデシュ、ラオスは、俊敏性に長けていて個の能力でゴールを守る事はできるが、予測、準備、判断は課題であった。トータル的に正確な技術の発揮は難しかった。

2) 中国、DPR Korea は、ゴールを堅実に守る事はできるが、積極的に DF と協力してボールを奪うことが少なかった。ただ、シュートストップにおいては、シュートを打たれそうな時に、アラートに準備ができ、安全確実な技術を発揮していた。

3) タイ、オーストラリアは、ゴールを守りながら、積極的に味方 DF ライン背後を狙う姿勢が見られた。ただ、そこにはスタートポジションを高く保つだけで、DF との距離感から予測し決断しても、技術の発揮に問題がある場面も見られた。タイの GK は体格的にも優れ、迫力を感じる選手であった。

4) 日本、韓国は常に DF との関わりを持ち、プレーの予測、準備、決断ができていた。シュートストップにおいても、瞬時に状況に応じた対応、技術の選択が出来た。更に、味方の DF ラインの背後への狙いのあるポジショニングから、予測、決断、実行が伴ったプレーが多く見られた。

【ブレイクアウェイ】

守備においてコレクティブに守備組織を形成する中、GKとFPが関わりをもってボールを奪う場面や、ペナルティエリアを飛び出してプレーする場面が多く見られた。特に、日本、韓国のGKはプレーする前の準備が優れていた事により、狙いのあるポジショニングからの判断、状況にあった技術を発揮することができた。他国のチームは狙う意識はあるが、状況に応じたポジショニング、前に出るか出ないかの判断やプレーの正確性にも課題があった。更に、クリアリング、フロントダイビング等の技術の発揮には不正確なプレーが見られた。しかし、守備範囲の拡大という面では、レベルが上がってきている傾向にあった。

【クロス】

今大会を通して、全体的にクロス攻撃は多くは見られなかったが、その中でもGKとしては上手く対応できない場面が見られた。ボール保持者を視野に入れて、GKがゴール前の状況把握から守備の狙いのあるポジショニングを判断し、決断、実行に移すまでの準備が、十分にできていないことが多かった。この様な状態でクロスボールへチャレンジをするため、正確に技術を発揮する事ができなかった。加えて、移動のテクニックについても課題が見られた。具体的には、クロスステップからのジャンプキャッチが少なかったが、日本の⑩大場は準備から技術の発揮に至るまで、すべてにおいて優れていた。

【シュートストップ】

シュートストップにおいては、プレーの前の準備が整ってなくても、個々の身体能力や感覚で守るゴールキーピングが見られた。しかし、決勝トーナメントに進出してくる国のGKは、的確なポジションを常にとり続け、DFと協力して安全確実なゴールキーピングを見せるGKがほとんどであった。シュートストップの観点からだけ見れば、控えのGKのレベルも高かった。

【攻撃参加】

今大会、バングラデシュ以外の国では、攻撃の起点がGKからのキックやスローイングから始まることが多かった。(バングラデシュに関しては、ゴールキックもDFの選手が蹴っていた。)

全体的に、FPもGKからの配球を受ける意識が高く、守備から攻撃の切り替えを早く行うことによって、相手陣内に早くボールを運び、シュートまで結び付ける攻撃も見られた。ただ、課題として挙げられるのは、サイドボレーやロングキックに関しては、成功率が低かったことである。パスの受け手とのコミュニケーション、キックの質などがこの年代からレベルアップすると、アジアのGKのレベルも更に上がってくると思われる。

パス&サポートにおいては、丁寧に味方へパスをするプレーが多く見られ、有効な攻撃に繋がる場面もあった。しかし、受け手とのパスのタイミングやパスコースのズレ、パススピードの弱さにより、相手FWにプレッシャーをかけられて、ピンチになることも散見された。

【まとめ】

守備において、今大会で日本代表に選ばれた3人のGKは、プレーする前の準備がアラートに出来るため、正しいプレーの選択ができ、確実な技術の発揮へとつながったことは成果として挙げられる。更に、積極的にボールを奪う意識も高く、DF背後への狙いは常にトライしていた。このような守備範囲の拡大は、普段の取り組みの成果の現れであると考えられる。

しかし、ゲームの中では、DFとの連携で曖昧なプレーもみられ、GKからの発信力(コミュニケーション)には課題が残った。DFへの自信あふれる指示、決断した時の「キーパー」「クリアー」などの具体的な指示の声の大きさなど、他のFPの選手に明確に伝わるようにしたい。日本のGKは、この年代で個々の技術の習得が出来ている分、FPとの連携も追及していかなければならない。

攻撃においては、GKによるプレーの後の関わりが多くみられ、積極的に攻撃参加ができていた。課題としては「止める、蹴る」「パスの質」「ロングキックの精度と球種」に改善および向上の必要性を感じた。パス&サポートでは、GKからの組み立てによりシュートまで繋げられる場面が増えたが、ロングキックに関しては成功率が低く、継続的な課題と言える。

➤ 日本の育成への示唆

「テクニカルに、スピーディーに、コレクティブに、そしてタフに」という方向性で進化する世界のトップレベルでの戦いにおいて、「日本が再び世界のトップに立つために」という観点の元、この年代で身につけておきたい項目を挙げたい。

「この年代」というのは、U-16の年代を指し、チーム戦術の中で発揮する個人テクニックと個人戦術を完成形に近づける年代である。そして、世界大会までの一年間で、チームの戦術的な戦いの中で、個々の選手が各自の役割を質の高いレベルで遂行できる段階に入っていく。そのためには、やはり個人のテクニックの獲得と戦術の理解がベースになる。

1)プレッシャー下でのテクニック

ゲームの主導権を握るためには、ボールを失わないことが大切である。そしてボールを失わないことのみならず、ゴールを目指すために「ボールを失わずに前に運ぶこと」が必要である。そのベースとなるのは、個々のテクニックの質である。

この点に関して、「この大会で通用した・通用しない」という観点だけではなく、世界を基準にして言及したい。それは、スピード、パワー、体格に秀でた個が、コレクティブに戦い、チームとして意図的にボールを奪いに来る、という守備に対峙したときに必要なテクニックである。

◎判断を伴った動きながらのテクニックの質の追及

日本のストロングポイントであり、生命線と言っても過言ではない。相手DFの球際でのコンタクトプレーやパスコースを規制することができる近距離までのアプローチを可能にする時間を与えないためにも、ボールを足元に一度コントロールした後で判断することや、2タッチ目で次のプレーに移るようなプレーを習慣化させてしまうことは避けたい。

つまり、相手 DF のプレッシャーを真正面に受けないように、人もボールも動きながらコントロールするテクニックを身につける。身体もボールも自由に扱えるようにトレーニングすると共に、対峙する DF がいるような、実際のプレッシャー下で、判断と選択肢を伴って発揮できる必要がある。

◎「止める・蹴る」の質の追求

特に「蹴る」の部分の質の追求について言及したい。動きながら出すパス、トップスピード(スプリント・ドリブルなど)の状態に加え受け手もアクションしている状況でもずれない精度の伴ったパス、コンタクトプレーを伴うような多少、体勢が崩れた状況下でも受け手に対してずれないパスの質を求めたい。

また、今大会では複数の選択肢を持ちながらプレーし、相手の状況を観て適切な判断をして出したパスが弱い場合がとでも多かった。パスの受け手がボールを持った際に、相手 DF に近距離で対応されるような状況を作らないパススピードが求められる。

◎コンタクトプレーの向上

上記 2 点を身につけプレーしたとしても、ゲームの中では、球際でコンタクトしながらのプレーが避けられない場合も必ずある。コンタクトプレーの状況下において、身体の「大きさ」や「強さ」を理由にボールを失ってしまうのではなく、ボールを失わないためにコンタクトプレーを「テクニック」のひとつとして身につけたい。身体の使い方や、状況に応じてアーリーヒットを行うなどのテクニックを向上させる必要がある。また、コンタクトプレーに対応できる身体の使い方や、アーリーヒットのテクニックだけでなく、相手の DF がどちら方向から来ているのかを観て把握し、遠い足にボールを置き、素早く相手 DF から離れる、味方にパスを出すなどの習慣も必要である。

本大会では、特に DPR Korea の⑩KIM、日本の⑨田中がこのテクニックを発揮し、前線でボールをおさめ、味方が関わるための時間を作り、攻撃の基点になった。

2) 戦術理解の充実と実践力

◎攻撃の優先順位を理解

主導権をもった戦い方を目指すと、その過程で時に、「ボールを失わないこと」の優先順位が「ゴールに向かう」ことよりも先に来ってしまうプレーぶりが見受けられる場合がある。具体的なプレーとしては、「前を向かない」、「前方へのパスが入らない、狙わない」、「前方でパスを受ける為のアクションがない又は少ない」といったプレーである。今大会の日本の攻撃においても、このような場面が比較的多く見受けられた。この様なプレーからは、結果的に攻撃のスピードアップやテンポの変化が生まれにくく、また、得点機会を逃すことにもつながってしまう。

「ボールを保持しながら、ボールを前に進めていく」ために下記のことを身に付けたい。

・動きの優先順位

ボールを受ける為のアクションは、プレーヤーの意図によって異なる。DF ラインの背後のスペースへのアクション、ボール保持者の前方だが DF と中盤のライン間のスペースでパスを受けるアクション、ポー

ル保持者と同ラインでパスを受けるアクション(その結果、ファーストコントロールで前方のスペースにボールを運ぶことができれば、ボール保持者に対応している守備ラインを突破できる、3ラインのどのラインかは状況によって異なる)、ボール保持者の後方でパスを受けボールを失わず攻撃をやり直すためのアクションなどである。

しかし、アクションやパスの選択の多くが、ボール保持者の後方でボールを失わないためだけのものになると、「ゴールに向かい得点を奪う」という、攻撃の目的は果たせなくなるばかりか、攻撃時における状況に応じたスピードアップも困難になる。また、得点機会が生まれやすい、アタッキングサードへの進入機会、フィニッシュのチャンスも創り出せなくなる。状況に応じて、攻撃の優先順位を理解したアクションを増やしたい。

・パスの優先順位

パスには受け手と出し手が存在するため、上記の「動きの優先順位」、つまり受け手のアクションにおける優先順位と判断も関わってくるが、パスの出し手の優先順位の理解、判断力についても高めたい。フィニッシュの場面を創り出す突破のパス、相手守備ブロックの中ではあるが前を向かせるパス、そしてボールポゼッションを維持しつつ、攻撃をやり直すための失わないパス、サイドチェンジするパスなどを状況に応じて判断し、意図的に使えるようになる必要がある。日本の課題の項で言及した「パスの精度」とともに、絶対的なパススピードを高める必要がある。妥協のない反復と、相手DFがいる状況下で、ゴール(又はゴール方向)がある実践形式のトレーニングの中で指導者が質にこだわって要求し続けたい要素である。

◎攻撃に関わる意識の改善

日本の成果の項に記述した「ビルドアップの質」と、「状況を判断しながらプレーする力」をさらに強固なストロングポイントとするため、そして、攻撃の関わりをさらに増やし、スピードとテンポの変化にとんだ攻撃を可能にするために、下記のことに取り組みたい。

・サイドバックの攻撃参加

相手の攻撃に対するリスク管理をしながらも、前方にスペースがあれば積極的に攻撃に関わる回数を増やしたい。このためには、ビルドアップ時や攻撃のやり直し、サイドチェンジの場面において、MFやFWにタイミングよく関わる事が可能となるスタートポジション、プレーへの予測とそのための準備がポイントとなる。サイドバックが攻撃参加することで、攻撃のバリエーションを増やすことに繋げたい。

・前線の選手を追い越す動き

中盤の選手も同様に、状況に応じて前線の選手を追い越す関わりを増やしたい。この点については、意図的な崩しとそのアイデアにもつながる部分であり、守備組織が強固な相手に対して得点するには必要になってくる要素である。これらを可能にするには、オフ・ザ・ボールの選手同士がお互いに観ておくこと、3人以上の関わり、そして動き出しのタイミングとダイアゴナルランなどのアクションの工夫が必要

になってくる。

◎意図的に奪う守備の向上

本大会の参加国の多くが、ボールを意図的に動かしながら攻撃を組み立てるスタイルでプレーしていた。世界のサッカーの方向性も同様であり、選手それぞれの判断や局面での判断のみに頼った守備では、今後、十分な対応ができなくなる。

・個人でボールを奪える守備力

1vs1 の対応における強さと自信を身につけ、球際でコンタクトをしながらでもボールを奪える個が集まったチームとなる必要がある。集団でコレクティブに連動してプレーし、相手ボール保持者へのパスコースを規制することや、ミスを誘うところまではできるが、球際の局面においてボールを奪うための個人の能力はまだ向上すべき点である。個々の選手の個人でボールを奪える守備力の向上がなければ、質の高い個が意図的にボールを動かし、連動、連携して崩してくるようなレベルの相手には対応できなくなる。

アプローチの際のスプリント力、ボール保持者との距離感覚の見直し(これまでの「近い」対応は世界では充分な「近さ」ではない)、対応の際のステップワーク、コンタクトの強さと体軸のバランスを保つ力など、守備組織を形成する選手個々の守備力を向上させる必要がある。

・集団でボールを奪うためのコレクティブで意図的な守備

上述したように、個の弱さがボールを奪えない原因にならないように、選手個々の守備力を改善すると共に、この年代では、更にチームとしてボールを奪うエリアや奪い方について理解し、狙いをもった意図的な守備も身につけたい。つまり、チーム戦術の中で「個」の役割を遂行しながら、コレクティブに意図的な守備を実行するということである。

このためには、守備の戦術理解力を向上させ、3 ライン間およびサイド又は中央のそれぞれにおけるポジショニング、3 ライン同士が適切な距離を保ち、スペースをコントロールする力をゲームを通して発揮し続けられるようになる必要がある。

また、その中で、意図をもって連動するためには、『コミュニケーション』が鍵を握る。ボール保持者を挟みにいくのか、ファースト DF の後方のスペースをカバーするのか、また、その前段階でファースト DF とセカンド DF が明確であるか、そして、それぞれの役割の理解、相手ポゼッションの方向を規制するなどといった戦術理解とコミュニケーション能力を高めなければならない。

➤ トピック

◎新ルールでの PK 戦

今大会ではノックアウトステージにおいて、90 分で勝敗が決しない場合は、PK 戦を行うというレギュレーションであったが、その PK 戦においては、新ルールである ABBA 方式が採用された。

日本チームは本大会で、勝利すれば世界大会への出場権を得ることになる準決勝、韓国戦において、

1-1 で 90 分間のプレーを終え、PK 戦で決勝戦進出を決することになった。日本は 1 本目を先攻でスタートし、4 人目まで蹴ったところで、2 人の選手が外していた。その時点で、PK 戦のスコアは、2-2 であったが、新ルールにより 4 本目を後攻で蹴った韓国が、5 本目も連続で蹴ることになり、4 本目と 5 本目を連続で成功させた韓国チームが、4-2 で勝利する結果となった。

◎日本チームのグラウンド状況への対策と用具の準備

今大会では、激しいスコールが影響した試合はほとんどなかったが、全 16 ゲーム中 5 ゲームにおいて、ゲーム中またはキックオフ前に降雨があった(AFC 公式記録による)。会場となったピッチの状態は決して悪いものではなかったが、降雨による影響で、ゲーム中にスパイクが滑り、転倒する場面も見受けられた。

そのようなピッチの状態でのゲームにおいて、日本の選手たちは、全員が取り換え式スパイクを使用していたわけではなかった。それが影響したかは定かではないが、世界大会出場を決するゲームの中でも、ピッチ状況が影響して転倒する場面も見られた。

日本国内のゲーム環境では、人工芝の会場でプレーすることも多くあり、日常的に取り換え式スパイクを使用することを習慣化することは困難だが、アジアのゲームではその準備も必要になってくる。

◎日本の審判の活躍

今大会の決勝戦の DPR Korea 対 韓国戦のレフェリーを日本の梶山芙紗子氏が務め、坊菌 真琴氏がアシスタントレフェリーを務めた。このゲームは、アジアのチャンピオンを決める重要なゲームであると共に、両国の誇りをかけた激しいゲームとなることが予想された。しかし、開始 10 分の間で、梶山レフェリーがファウルと正当なチャージを明確にジャッジし、適切なアドバンテージを採用しながらゲームを的確にコントロールした。その結果、激しいコンタクトがあるゲームでありながらもラフなプレーがなく、決勝戦に相応しいゲームとなった。

日頃、あまり表に出て評価を受けることが少ない審判員の方が、日々の地道な努力と取り組みによって、アジアの決勝戦という大舞台で素晴らしいゲームを演出したことは、大いに評価されるべきである。

以上。

文責 JFA テクニカルスタディグループ